

# 速水流茶道と備前・備中・備後の門人たち

井 上 秀 二

岡山理科大学

(1994年9月30日 受理)

## はじめに

速水流の宗匠についての研究は、菅見によると、高草藍山氏の『緑塵』『清音』（1941年）と林左馬衛氏の「滌源居と速水流」（『日本の茶家』1983年）によって、すでに先鞭がつけられている。けれども、速水流の茶道史の研究については、公開されている家元史料が少なく、存分に論及するのが困難なこともあって、いまだに不明な点を数多く残している。こうした状況を見据えて、この小稿は、東北大学附属図書館蔵「茶博士速水宗達稿本並速水家雑纂」と岡山県立博物館・金光図書館をはじめ備前・備中・備後地方（以下「三備」とする）に残存する速水流茶道に関する史料を発掘した上で、それらを基に、流祖宗達から四代宗汲までの足跡をできるだけ克明に浮き彫り化するとともに三代宗寛・四代宗汲を中心に、三備においていかなる伝授と形態が採られていたかの実際も可能なかぎり究明してみたい。

## 速水流の歴代宗匠について

### 流祖宗達

速水家は、速水氏系譜によると家祖は光慶である。これによると「丹波秀康為猶子繼父業家方有家能任醫術也、秀頼公北方附御不例令治之在速效依之拜恩賞賜速水性、後秀忠公欲为天樹院近醫然厭住江府以老病辭之蟄居千洛、寛永三年八月六日卒七十三法名道甫葬千相國寺冷香軒子孫為氏等」<sup>1)</sup>と記されている。宗達は、天文4年（1737）に玄達の長男として京都釜座出水上で生まれた。名は和道、号は束々完・希棟・扶桑翁である。幼少から儒学を京都堀川出水通り下るの古義堂で学んだ。古義堂は古学堀川学派の祖である伊藤仁斎の開いた塾である。『古義堂文庫目録』<sup>2)</sup>によると、同塾三代東所・四代東里との交流を物語る書簡がある。宗達の人間形成と多くの茶道書を著す基礎は、まさに古義堂で養われたと思われる。宗達は国学を小澤蘆庵に学ぶと同時に、茶道を裏千家一燈宗室に学んだ。宗達の業積として、千家の宗匠と同じく利休や宗旦にすたれた点前の再興に努めた点が挙げられよう。再興した点前伝書には、「茶通箱薄茶組入伝」「行盆点風呂右手前点法二段」「真之盆点之式初段」「棗之盆点之式」等<sup>3)</sup>がある。

宗達の茶道論に関する著述は幾つかある。例えば、『茶則』の中には「何必謂容禪乎神道

儒教何嫌<sup>4)</sup>がある。従来の茶道は禅と深くかかわっていたが、宗達は神道・儒教も拒まなかった。速水流の歴代家元は、他の茶家とは異なり「宗寛茶事録」<sup>5)</sup> (文久元年)によると、古義堂二代「東涯筆横物七言古詩」が掛物とされ、さらには、三代「東所筆古希ノ時認候横物隸書」も掛けられた。宗汲筆「月次稽古茶事録」(安政2～文久元年)にも五代「東峯(靖共先生)秋扇詩」が掛けられている。六代栖斎(徳藏)は稽古茶事に幾度か招かれていることを思うと、速水流は伊藤家と強く結び付いたことがうかがわれる。

宗達には、点前について作成された伝書もある。「行之草三袋点法」「亂飭薄茶点法之式風炉右手前」等である。七事式にも、肄業式として宗達なりの工夫が施された。宗寛加筆の「茶道七事式」<sup>6)</sup>によると、「於千氏七事ト云ハ、セツノコト有ルヲ以テ唱フ、風呂ニ廻炭ヲ除テ、花寄ヲ加ヘテ云フ炉ニ花寄ヲ除テ廻炭ヲ加ヘテ云也、於当流ハ花橘又雪月花ノ二ツノ式有り、是ヲ加フ故九事トナル故肄業ト云、此字左氏傳隠公ニアリ」と記されている。ここからも、茶人として相当の力を備えていた点がうかがわれる。宗達の名を茶人としていっそう高めたものに、中宮御所での献茶を行なったこと、聖護院宮門跡盈仁親王より「養寿院」の号と「大日本茶道博士」の称を、さらには、後西天皇御物古瀬戸茶入銘「初瀬」も賜ったことである<sup>7)</sup>。その他の拝領物としては、盈仁親王御筆の「養寿」・「花橘」・「花入」・「盆香」等がある。「宗寛茶事録」<sup>8)</sup>には、献上の茶杓に関して「聖護院宮より被仰付、光格天皇様へ宗達削献上仕候扣へ三本之内、中節之分」という風に、そのいわれが書き留められている。すなわち、寛政元年進献茶杓、銘「取そへ」「てらすへ」「瓜沮」のことである。宗達は、思いがけない栄誉を賜った。

宗達の門人関係をうかがう史料として、高草藍氏の「池田治政ト速水宗達」(『黄薇茶話』1941年に所収)があるので、次にその原文を引用してみよう。

(前略) 先頃発見された速水流家元の筐底深く厳秘してあった一書類がある。之は凡て速水宗達自書で単に大願とのみ特筆してあつて寄進の面々を列記してある、即「郡山候(柳澤堯山)、雲洲候(松平不味)、備前御隠居一心斎様(池田治政)、備前虫明伊木加馬(伊木家老職)、阿波足利家、尼崎家老堀勘兵衛、備前家中一統、播州姫路諸家中、六篠東本願寺様、同所社中、伊勢松阪社中、江州八幡社中、越前丸岡某、加賀金澤何某、大阪何某外數人、大阪遍照院、加賀大聖寺、攝洲今宮村、河内古市村、河内小山村、勢洲白永村、美濃十五篠村、其外諸々」とあるが日付が記して無いからいつ頃の事かハッキリと分からぬが、備前隠居一心斎とあるから、池田治政候が隠居した寛政六年と、宗達死去の文化六年との間である。(後略)

これによると、宗達の門人は、近畿・中国・北陸・中部地方に広く存在したと思われる。「宗寛茶事録」<sup>9)</sup>には、懐石の料理における地方名産物の到来先が書き留められているので、これを介して、ある程度は門人の広がりも裏付けうるのではなかろうか。書き留められた

地名としては、江州八幡・飛州高山・越中・奥州・河内八尾・備前・備中・備後が数えられる（ただし、備中、備後については宗寛の時代である。後述）。

宗達の著述としては、宗曄が出版した物として『茶旨略』全1冊（文化7年）と『喫茶指掌偏』全3冊（文政7年）と宗寛開版の『茶則』全1冊（安政5年）がある。『茶旨略』の中で宗達著述目録で15種類<sup>10)</sup>に及んでいる。

好物には、吉妃棗・小掛台・香壺香合・四方菊置上香合・松ノ木香盆・長棗・宗達町棗・中棗・監籠炭斗・そてつ組炭斗・進献托水指・水月棚・清恭棚杉板木地・六角真塗敷板・遠山透桑苘盆等<sup>11)</sup>があった。宗達は、速水流の基礎を築き、文化6年に71歳で没する。

## 二代宗曄

宗曄は明和8年（1771）に生まれる。名は宣岷、号は守拙である。宗曄は、林左馬衛氏も指摘している通り、流祖宗達の茶書を数多く編輯している。宗達の晩年には、伝授書として「中宮御所命養壽院好御棚上点茶之式禮」文化5年（1808）5月なども著している。宗達没の翌年、『茶旨略』『喫茶指掌偏』を刊行する。さらには十三回忌を迎え、極真までの二十段階の点前の伝授書を編輯している。例を掲げると次の通りである<sup>12)</sup>。

「亂置点法」	（文政5年6月2日）
「亂飭点法」	（文政5年6月18日）
「二ツ袋点法之傳」	（文政5年7月2日）
「袋茶碗点法之傳」	（文政5年7月4日）
「三ツ袋点法之傳」	（文政5年7月8日）
「盆点之式真行草」	（文政7年7月19日）
「茶通箱点法」	（文政7年7月13日）

宗曄は、宗達の晩年から没後にかけて、速水流茶道の伝授書の整備に多くの時間を費やした。宗曄の編輯した伝授書は、以後は書写され、地方の門人に伝授された。宗達の業績を知りうるのも、宗曄の並々ならぬ執筆活動に負うところが大きいといえる。

ところで、宗曄に関する資料はまことに少なく、宗曄を調査した文書も3通を数える程度である。そうした中に、人見家四代宗知宛書簡「人見家文書」<sup>13)</sup>がある。晩年の宗曄を知る手掛りともなるので、次に抜記してみよう。

貴礼添拝見仕候、先以追而向寒相催候弥、御安静奉賀候、追、花之時節相成候、定而御出し可被下候奉存候、野子も十月之初より月中出し可申候、兼而大鏑茶いたし度候得共、何とか心咎して得出し不申候か、当年ハ早五十歳ニ相成候得ハ、何時まで世をpushうつり可申哉と思切而大佗と出かけ候、定而人々悪口可申

## と相楽候左如（後略）

文中で、「当年ハ早五十歳ニ相成候」と記しているから、これは文政3年（1820）に書かれたことになる。茶事録を付けるとともに、末尾には「道具、点前とも見処なし」と謙虚な表現もみられる。

文政8年（1825）8月14日に近江八幡の正福清舎（正福寺）に於ける「宗達追善肄業式」<sup>14)</sup>がある。宗暉が献茶式を執り行なう。会記の主客を見ると正福寺・願故寺・西川庄六・西川正五郎・西川利右衛門・森五郎兵衛・谷口惣兵衛・犬丸茂兵衛・寺村与九兵衛らがいた。会記に登場する西川利右衛門・西川庄六・森五郎兵衛は『滋賀県八幡町史』<sup>15)</sup>によると、近江八幡を代表する近江商人である。西川利右衛門は、代々利右衛門を名乗った。屋号を大文字屋と称し近江八幡の本店を中心に江戸・大阪などに出店をした。江戸では日本橋2丁目で蚊帳や畳表を商い、幕末には隆盛を極め江戸長者番附にのぼっている。西川庄六は利右衛門家の分家で、代々庄六を名乗った。庄六家は利右衛門家と同様、江戸や大阪に出店をした。大阪の場合、瓦町1丁目で幕末頃には砂糖を中心に商ない、宗暉の有力な門人の1人であった。宗暉は1年間滞在していること、さらには宗暉が備前の人見宗知宛の文書で、庄六が後樂園を参観したい旨よろしくと記している。森五郎兵衛（後述）ら豪商は宗暉と強く結びついていたことを物語っている。宗暉は、文政8年11月4日に55歳で没しているから、献茶式はわずか3ヶ月前の事であった。つまり晩年は八幡に滞在していたのではなかろうか。備前の門人には人見宗知・宗古・国富源次郎・三助・森市郎右衛門がいた（後述）。好物には、竹棗・鉄経筒花入・染付筆洗蓋香合・松の木梅形盆等<sup>16)</sup>がある。

## 三代宗寛

宗寛は文化10年（1813）に生まれる。名は弘道、号は守三軒・因是齋・螻居である。この宗寛には、嘉永元年（1818）5月4日から文久2年（1863）10月20日までの、すなわち宗寛36歳から50歳までの、地方在住の門人たちへの訪問先と入門者を書留めた宗寛筆「姓名録」<sup>17)</sup>がある。この史料に依拠して、年代と訪問先の地名を列挙すると、次のようになる。

年 号	月 日	訪問先
嘉永元年	5月23日～	美濃郡上八幡参着
2年	3月28日～	西国下向，堺，備前岡山・大供・児島赤崎村・小川村・ 下ツ井，備中河部・八田村・延友村，播州姫路船場・ 博労町・高長村
3年	4月　～	下向，姫路船場，博労町・宇佐崎
4年	2月20日～	堺
4年	2月20日～	西江州下坂本，東江州・永木村・新町

- 5年 3月20日～ 八幡宮, 播磨飾萬津  
11月21日～ 大坂東御堂
- 7年 5月19日～ 八幡下向, 浅小井村
- 安政2年 3月18日～ 播州下向, 木場村・宇崎村
- 3年 10月11日～ 姫路船場・竜野町
- 4年 4月10日～ 八尾, 上三条町  
11月5日～ 出立江州八幡, 河内八尾, 伏見
- 6年 2月13日～ 出立河内八尾下向  
4月7日～ 発足播州父子下向, 播州姫路・小林村・東山村・宇佐崎村・八家村  
9月29日～ 出立三備下向, 備後尾道, 福山, 備中笠岡・片嶋村, 備前児嶋下ツ井・味野・岡山
- 万延元年 8月14日～ 出立南河内下向  
10月 ～ 八幡下向
- 2年 2月10日～ 攝大和下向
- 文久元年 3月21日～ 出立八幡下向, 江州位田  
8月16日～ 河内南都下向
- 2年 2月1日～ 大坂河内南部, 河内八尾, 御駕籠町  
9月24日～ 攝河南下向, 南都東寺林町, 河内八尾
- 3年 2月6日～ 河南下向, 河内八尾

「姓名録」が伝えるように、伝授は、近江・摂津・河内・播磨・備前・備中・備後にまで及んだ。宗寛と幼少の宗汲が、近畿地方・中国地方を中心に势力的に活躍したことがうかがわれる。

宗寛の交友や門人の中には、「宗寛茶事録」<sup>18)</sup>によると、京都新在家に住み代々御所御用の粽や餅の調進を業としていた川端道喜や、宇治六番町に住む御通御茶師喜多立栄・立玄(明治期廃業)や立栄の姪宇治御通御茶師橋本玄可などが顔をのぞかせている。宗達以後降の門人であるかどうかは不明なもの、速水家と深いつながりを持っていた点は容易に推測できる。門人で近江八幡の豪商森五郎兵衛の生家は『滋賀県八幡町史』<sup>19)</sup>によると、代々五郎兵衛を名乗って発展した。文久3年に大坂本町2丁目へ呉服・木綿の店を出した。江戸にも本石町に出店し商売は多いに繁盛し、呉服店として全国に知れわたった。この五郎兵衛は江戸の出店の件を宗寛に消息で伝えている。宗寛から人見家五代宗玄に宛てた書簡によると、安政5年8月に宗達著『茶則』<sup>20)</sup>全一冊を開版し、10月9日には、宗達居士五十回忌追善茶会を催したことも分かる。

安政元年(1854)4月の京都大火以降も京都は幾度か火災に見舞われ、速水家も他の茶

家同様に被害を被った。文久元年（1861）5月22日、宗寛は朝茶事を催す。この茶事の会記には、「先年大坂より上京旧宅再入した」<sup>21)</sup>と記されている。文久3年12月26日に「灰掻の口上書」<sup>22)</sup>を差出したことによっても、速水家が先年類焼したことは裏付けられる。移転については、慶応元年（1865）9月12日の宗寛筆「桃花殿中献茶考存年記」<sup>23)</sup>は兔道（宇治）住守三軒となっている。さらに、慶応3年5月16日に宇治郷六番町に帰宅したと宗寛筆「三備下向記」<sup>24)</sup>にも記されていること、宗寛筆「兔道名水記」<sup>25)</sup>によると、喜多立玄は六番町に住んでいたため宗寛は喜多家に同居していたかもしれない。とにかく戦火を逃れ、茶師の住む宇治に仮宅を設けたことが分かる。しかし、在住はそう長くもなく、明治4年の「人別送り一札」<sup>26)</sup>によると、伏見第三区備後町の松田奎三郎宅で同居をする。備後町は現在の東大手町で宇治川に近く、当時は京都への物質輸送港としてわけても賑わっていた京橋とは数分の距離にあった。このことから、船を利用しての近畿地方・中国地方への伝授が容易であったと思われる。

宗寛筆の茶会記を見ると、幕末において興味をそそるものがある。速水流は公家との交流があったと言われている。宗寛筆「桃花殿中献茶考存念記」<sup>27)</sup>によると、五攝家の1つ一条大納言實良卿に喜多立玄と宗寛悱宗汲によって献茶が行なわれた。茶師喜多家と速水家は当時深い関係を物語るものである。喜多家は茶師として一条家の御用を勤めていたから、公家の館に出入りも容易であったであろう。茶会記を見ると床には一条忠香の短冊が掛けられ、琵琶床真中に茶碗荘りで迎付、点前、後炭等が3者で行なわれた。史料としては希少ではあるが、公家との結びつきが明らかになった。

「宗寛茶事録」<sup>28)</sup>に当時の武士と町人についても記されているので、次に紹介しておこう。

尾州様御会記相廻り申候間、入貴覽候、御道具組、御懐石市中之者と替り申事無之乍併御道具ハ名ト品と合躰申と存候、兎角名計ニて品の如何數ハ市中之事也、御懐石も大名の志みたれタルカ市中之者の奢タルと奉存候、大名右様の事ニ御座候ハ、我々余程引下ケ申度に存候、御一笑

幕末には商人も大名も豊になり、大名の体たらくを皮肉くっているのが興味をそそる。

萬延2年辛酉2月29日の「枳殻御殿露庵之御数寄屋正午時御茶頂戴記」<sup>29)</sup>の中で、宗寛は、京都の豪商角倉興市と連客になっていることを考えると、地方の豪商を門人にしていただけのみならず、中央の豪商とも関係をもっていたことが分かる。また、末宗廣氏の「茶事年表(2)」<sup>30)</sup>によると、「千家との交流を物語るものとして、安政3年3月に催された千宗左の茶会に、千宗室・大倉好斎・大町志摩守とともに宗寛自身が客となっている」としている。また、「宗寛茶事録」<sup>31)</sup>によると、宗寛は今日庵又隠での口切茶事にも招かれている。この時の客は速水宗寛・喜多立栄・平野友次郎・香具屋十右衛門であった（なお、この件の年代は不詳である）。玄々斎は、宗寛が死去した時にも哀悼の手紙を宗汲に差し出している。この事を考えると、両者はかなり緊密な関係にあったのであろう。宗寛は明治9年（1876）10

月14日に、伏見区大手筋新町西へ入ル宅で、64歳の生涯を閉じた。宗寛の死去に際して、近江八幡、三備の門人たちは宗汲に哀悼の手紙をよこしている。以上を考えると、宗寛は速水流の地盤を確固たるものにした人物といえるだろう。なお、宗寛は好物としては丸窓香合・埋木光悦形香合・緑何棗・釣付薄茶器・あんこう茶器・小卓棚溜塗・筋平丸釜・曲八角苘柏葉の圖・千鳥形竹ノ画杯等<sup>32)</sup>があった。

#### 四代宗汲

宗汲は天保11年(1840)に生まれる。名は修敬、号は貯雲斎・修敬である。宗汲は幼少から、父の宗寛の下で茶事の稽古に励み、次の「月次稽古茶事録」<sup>33)</sup>を残している。

「月次稽古茶事録」	安政2年正月18日より安政3年5月24日まで	23回
「月次稽古茶事録」	安政4年6月21日より文久元年7月6日まで	17回
「月次稽古茶事録」	安政7年正月19日より萬延2年正月21日まで	10回

この時に宗汲は16歳から20歳であった。修業の身であった宗汲は、道具組みを書き留めるだけでなく、手順、取り扱いの誤りも書き留めて修業に励んでいたことが偲ばれる。ちなみに、宗汲の稽古茶事に出席した顔ぶれは次の通りであった。すなわち、宗寛・川端道喜・名越弥右衛門・喜多川麻之助・渡辺半右衛門・尾崎彦兵衛・佐々木道春・古谷平右衛門・倉田方斎・尾崎春次郎などで、かれらは繰り返して出席している。また、父の宗寛とともに安政6年(1859)、伝授の旅として播州にも下向していることを考えると、父の宗寛から速水流の相伝を十分に受けることもできたのではないだろうか。宗汲は、宗寛と同じく地方へ出向くことが多く、その伝授の旅は、三備について調査した文書によると次の通りである。

年	月 日	主な下向先	史料
明治10年	1月9日	尾道	茶秘録
12年	12月27日	岡山	汲芳会記
15年	6月30日	岡山	足庵日記
16年	10月19日	岡山	足庵日記
17年	4月1日	尾道	天野五十歳祝賀茶事録
20年	3月26日	岡山	足庵日記
21年	6月6日	岡山	足庵日記
22年	10月9日	岡山	足庵日記
27年	5月13日	尾道	友松茶事録
28年	12月12日	尾道	友松茶事録
32年	12月2日	尾道	友松茶事録

42年	4月5日	児島	福島三五郎宛手紙
43年	12月2日	尾道	友松茶事録
大正元年	11月	妹尾	福島三五郎宛手紙

このように、明治になってから宗汲は毎年のように三備を訪れている。福島三五郎に宛てた書簡<sup>34)</sup>によると、宗汲は、山陽鉄道の開通に伴って京都から岡山を訪れ、岡山に数日間滞在して稽古をつけた後、人力車を用いて児島の野崎邸まで足を運び、ここに数日間逗留して稽古をつけ、次いで、備中笠岡に逗留して稽古をつけ、その後、汽車を用いて備後を訪れ、天野嘉四郎宅等に逗留して稽古をつけ、直ちに帰京するといった具合であった。

宗汲の業績としては、明治11年より京都北野神社の献茶式が京都における各家元の年番制になり、藪内家・表千家・裏千家・武者小路千家・堀内家とともに速水家も加わっていることである。熊倉功夫氏の「茶道における近代」<sup>35)</sup>によると「北野神社献茶における速水流の場合(中略)「庚寅(明治23年)12月献茶に付他国当流中江有志文通住所姓名之記」によれば、奉仕をよびかけ地方の門弟として、大阪4名、河内2名、播磨5名社中3、備前6名社中1、備中3名社中1、備後9名、安芸4名、近江2名社中1、美濃3名、飛騨4名、越中(人数不明)、信濃1名、加賀1名、山城10名の姓名が書きあげられており、詳細な出納を記している。会後の決算によれば、収入は総額83円25銭にのぼった(後略)」としている。「北野神社献茶祭新調御茶具奉納之記」<sup>36)</sup>によると、明治16年12月1日に速水流が献茶式を担当したので、宗汲はこの時以来、全国の門人に協力を呼びかけた。これに応じて門人たちは、献茶道具の新調に多額の寄進を行なった。備前の人見宗玄筆「足庵日記」<sup>37)</sup>によると、

「明治十六年十月十九日速水宗汲来る、北野献茶祭ノコト話有之」

「同十二月一日北野献茶祭ニ付、於此方献茶後、終日稽古人員十五人、委細会記ニ載ス」

「明治二十三年十月八日速水ヨリ献茶ノ有志金ノコト申来」

と記されている。宗汲は、備中の門人たちにも有志金の依頼をした。これに伴って門人に贈られた節留の茶杓の箱には、「明治癸未十二月一日北野社献茶拝服所用拙作地 宗汲(花押)」と記され、筒にも銘が「跡乃志留し」と記されている。このことから、家元を中心に門人たちがいかに結束し、いかに組織の充実を図っていたかがうかがわれる。

宗汲より妹尾の門人福島三五郎宛の書簡<sup>38)</sup>によると、宗汲は自宅で、毎月4の日には相伝を、27日には稽古をそれぞれ行ない、さらに加えて、地方への伝授も行なっていたことを考えると、まことに多忙の身であった。宗汲は作庭にも優れていたらしく、三五郎や尾道の門人生玉茂七に宛てた書簡<sup>39)</sup>には、作庭で多忙なことが触れられている。なお、三備にも宗汲作と言われる茶庭がいくつか存在する。



宗汲は、速水流が開花する時代にあって、宗寛がなしえなかった京都市中への居宅の移転に努めている。尾道の門人生玉茂七に宛てた明治36年(1903)の書簡<sup>40)</sup>では、その宛て先は「京都武者小路新町西へ入」であったが、ここでの滞在はそう長くもなく、まもなく柳馬場丸太町に転居している。ともあれ市中への復帰を果たしたわけである。宗汲が、他流の茶家と比較してこの時期に恵まれた環境にあったのも、父の宗寛と同じく地方の門人たちの下に積極的に出向き、伝授を行なった結果であろう。宗汲は、大正13年(1924)5月10日、午後2時に京都油小路中立売上ルで85歳で没する。好物には、昼夜棗・圓融盆・五葉松鶴頭形外溜塗内金箔茶入等<sup>41)</sup>があった。

### 備前・備中・備後の門人について

#### 備前の茶人

岡山藩については、宗寛筆「御由緒書」「乍恐奉願上候口上書」<sup>42)</sup>を安政7年(1860)に大西定次郎に差し出している。これによると、天明元年(1781)11月に宗達は岡山へ来岡した。

武家で速水家との門人関係について述べると、まず宗曄より文化8年(1811)に人見宗知宛の書簡「人見家文書」<sup>43)</sup>の中で、宗達3回忌に伴い宗達好の香合を、岡山藩家老周匝池田家八代長玄(大和守)2万2000石に差し上げたいと記している。また上京の時、御目通りの札を宗知に謝している。このことは、周匝池田家が宗達の時代より、深いつながりがあったことを裏づけるものである。池田家十代長貞(伊賀守)も、天保4年(1833)4月に速水家を訪れ宗寛の茶湯のもてなしを受けていることが、宗寛筆「池田伊賀御出之節茶湯扣」<sup>44)</sup>により知ることができる。次に「姓名録」<sup>45)</sup>の中で岡山藩の池田家家臣に伝授がなされた。安政4年に伏見備前屋敷で留主居役に、安政6年11月には三備下向時に池田伊賀家臣4名に、文久元年8月に大阪備前家中天満屋敷で9名入門、同2年2月に4名入門した。宗寛は、慶応3年に「三備下向記」<sup>46)</sup>を執筆しているが、その中に、岡山藩主池田茂政と宗寛の関係を裏付ける箇所があるので、次に抜記してみよう。

四月二十八日雀部六左衛門方へ参りし節の事。

(前略)昨夜太守様、御手自御提へ被遊此驚は御後園にて御打たせに相成候御品、宗寛酒もたへ申候由に付一献之媒も可成と被遊仰、六左衛門より遣し候様との御内命、誠に有難頂戴直に料理仕出し頂き、余はみそ漬に致し為登申積と致候。(中略)夫より伺上候義畏入候所、香木之御香合之方龍虎に御作定に相成り、御認振りの御相談に付甲へ一行に被遊候様にと奉申上候事、御花入萬歳に御治定、赤旃壇御認振御相談に付不味候御好之心組御香合之振申上候事、御箱夫々二十九日中御出来に付、晦日早朝雀部家にて書付可仕筈に仕置候。晦日雀部方にて太守下命之書付をなす事。

早朝伊木様日置様隠居土倉様御側御用人へ伺に來り、宗釜同道にて雀部へ來る、

其所へ竹村隠居小山新作信楽屋等入来。(後略)

この文書に登場する伊木・日置・土倉は岡山藩の家老職であることから、宗寛と岡山藩の関係の深さを裏付けることができよう。

備前の門人との関係を明らかにする資料としては「人見家文書」<sup>47)</sup>がある。人見家は小橋町に住み、歴代岡山藩家老の周匝池田家に任せ、茶坊主御数寄方を勤めた家柄であった。人見家の四代宗知は、天明7年丁未4月11日、茶通箱、唐物点台天目を伝授する旨の誓詞を宗達と交わしている。この時、宗達は49歳、宗知は23歳であった点を考えると、これがおそらくは、宗達と人見家の師弟関係の始まりであったとも推測される。六代宗古も文化6年に、養寿院(宗達)と二代宗曄に誓詞を交わしている。四代宗知は文化12年、京都速水家「滌源居」に茶道修業のため3年にわたって寄宿する。六代宗玄も天保15年、同じく3年にわたって寄宿し修業するとともに、その間、「茶説」「諸違柵之扣」等<sup>48)</sup>の写本も行なっている。四代宗知から六代宗玄にいたるまでに、備前・備中には607名の門人がいた。このように人見家は、備前における代表的な教授者として活躍するのである。

人見家の茶会控えとしては、次のものがある。

「茶の湯留」文化14年10月より天保2年まで	62回
「汲芳会記」明治11年10月より明治23年8月18日まで	78回
「人見宗玄他茶事控」明治14年3月25日より明治17年12月8日まで	23回
「茗燕行記」明治17年3月27日より明治22年12月22日まで	33回

これらの茶会記は、五代宗古・六代宗玄の手になる茶会控えとして、幸運にも戦災を免れ今日も存在する。備前の速水流茶道を考える上では唯一の資料といってもよいだろう。今、宗玄の自会記である「汲芳会記」<sup>49)</sup>を取り上げて、宗玄がいかに精力的に茶事を催したかを見てみると、次のようになる。

明治11年	5回	18年	11回
12年	4回	19年	12回
13年	2回	20年	3回
15年	4回	21年	5回
16年	9回	22年	3回
17年	19回		

なお茶事は、口切・朝茶・稽古初・会始式・女子会始式・献茶祭・耳順会・還暦祝茶・中元会始である。宗玄はさらに60歳を迎え、耳順の祝賀茶事を3回、還暦祝茶事を10回、連日にわたって催した。なお宗汲も、上の「汲芳会記」<sup>50)</sup>に挙げられた茶事には、2回ばかり同席している。

茶会控えに登場する有力町人の茶人としては、国富源次郎と森市郎右衛門がいる。国富家は、『近世岡山町人の研究』<sup>51)</sup>によると、江戸後期に岡山市紙屋町で銭屋・生魚問屋・諸物問屋を営んだ。豪商で、幕末には惣年寄も勤めて「財力岡山一」といわれていた。森家は、岡山で同じく惣年寄を勤め、諸物問屋・両替商を営んでいた。森市郎右衛門は、その分家と思われる。なお、国富家は明治の中頃まで、岡山では中心的な数寄者として活躍することになる。宗曄以前の門人関係等を裏付ける文書としては、「人見家文書」<sup>52)</sup>以外には、わずかに国富源治郎・森市郎右衛門宛への宗曄からの年賀状を見るのみである。

「三備下向記」<sup>53)</sup>によると、慶応3年4月25日に、宗寛と備前の門人が茶湯を楽しんだと記されている。宗寛は、藤岡陽右衛門（不祥）宅で連客として竹村隠居、小山新作を四畳半席に招き、床に宗寛筆の一行を掛け、備前名水「御膳水雄町」を取り寄せて名水点を行なうとともに、その水で認めものもした。今日でも、雄町の水で認めた一行物が伝わっている。

幕末から明治初期にかけての有力茶人としては、紺屋町で清酒醸造を営む石津勘七郎、東中島町で醤油醸造を営む岡田太郎、大供村の大庄屋で道具持ちで実力者でもあった小山新作（宗巖）がいる<sup>54)</sup>。明治になると、時の県令高崎五六も速水流の茶湯を嗜んでいる。宗玄の茶会控え<sup>55)</sup>によると、高崎は明治14年5月15日、宗玄、高戸源次郎たちを招いてもいる。県六等警部の高戸原次郎も茶会をいくつも催している。上道郡長書記の吉田禎二<sup>56)</sup>は、国富に屋敷を構え、4つの茶室を持ったかなりの道具持ちであった。と同時に禎二は、宗玄の亡き後、教授者の小野宗栄を屋敷に住まわせて教授を担ったともいわれ、明治末期の速水流では代表的な茶人であった。

味野には野崎武左衛門がいた。『児島風土記』<sup>57)</sup>によると、幕末に武左衛門は一代で日本の塩田王となった。嘉永元年には台天目点法も許されている。貴族院多額納税議員であった子の武吉郎には、宗汲がたびたび逗留して点前の指導を行なっている。野崎家は、その財力を用いて屋敷内に茶室を4ヶ所も設け、さらに加えて明治41年には、武吉郎の還暦記念に宗汲を招いて別邸にも茶室「清恬」を建てる。まさに宗汲の強力なパトロンであった。笠岡から妹尾に移住した福島三五郎も教授者の一人で、妹尾での速水流の基盤は三五郎によって作られた。宗汲が岡山の行政職にあった野崎・高崎・高戸・吉田を門人に迎えている点からも、当時の速水流の繁栄をうかがうことができるだろう。

#### 備中の茶人

備中の商業港であった笠岡には、町人階級に属する多くの門人たちがいた。宗寛筆「姓名録」<sup>58)</sup>によると、安政6年(1859)11月には八幡宮神職立神肇が入門している。立神家は笠神社の代々の神職を務めていた。この笠岡は宗寛以前の速水流資料には登場しないけれども、本町筋を中心に商家が軒を並べて、家々には茶室が設けられるといった様相を呈していた。その中に、数寄者としては村戸長の丸山九右衛門、豪商の生長小十郎らがいた。ま

た、教授者としては塚本完太郎がいた。完太郎は幕末から明治初期に活躍した茶人であり、人見宗玄筆「福山日記」<sup>59)</sup>にもたびたび登場するから、かなりの実力者であったと思われる。明治末期には教授者として久西恒吉がいる。恒吉は和歌を好んで翠月堂と号した。笠岡の町人たちが明治9年12月、宗寛の死去に伴って宗汲に弔問を差し出していること、また「三備下向記」<sup>60)</sup>も示すように、宗寛が京都から尾道・福山・笠岡・下ツ井・岡山・姫路へと船を用いて伝授の旅を行っていること等を考え合わせると、笠岡という商業港の商人たちがいかに速水流を愛したかの一端を偲ぶことができるのではないだろうか。宗汲から福島三五郎に宛てた文書にも、笠岡に伝授のために逗留する旨が記されている。これらの史料から、備中は宗寛によって開拓されたとみるのが妥当であろう。

笠岡と同様、備中の中心である商業港玉島と倉敷は従来藪内流が盛んな地域であったが、倉敷は人見宗知・宗玄の「門人姓名記」「門人名義録」<sup>61)</sup>によると、神官の小野尉や法輪寺などの門人が見られる。

### 備後の茶人

瀬戸内海の中継商業港として発達した尾道では、問屋仲買人が活躍して多くの財を蓄えていた。『尾道市史』<sup>62)</sup>によると「尾道町士堂に住んで質屋業を営み、屋号を東屋と称した豪商で有力な門人に、年寄同格の天野半次郎（宗篤）と半次郎相統嘉四郎がいた。嘉四郎の方は、地主で諸品会社頭取となり、廃藩置県に際して諸品会社の存続に尽力した。第六十六銀行の頭取も勤める」。宗寛筆「姓名録」<sup>63)</sup>には、安政6年（1859）10月25日に宗寛が尾道に下向した時、この嘉四郎が入門したと記されている。嘉四郎と同じく有力商人として、町年寄で豪商の橋本吉兵衛（藪内流）がいる。かれは回漕、塩業、金貸業を営むと同時に、明治には第六十六銀行の初代頭取も勤めた。豪商の島居儀右衛門（鶴巢）は薬舗兼醸造酒塩業を、商人の中尾彦助は十四日町に住んで綿問屋を営んだ。明治の中頃には大藤忠兵衛が活躍する。忠兵衛は十四日町で呉服太物商を営んだ。以上の人たちは、財力に訴えて尾道を一望できる山手に別荘を構え、茶室をいくつも造っている。僧侶では千光寺住職の多田實圓がいる。實圓は後に醍醐寺座主三實院門跡となる。浄土寺・雲晴寺の名刹も門人であった。宗寛・宗汲はこの尾道へ出向き、多くの門人を抱えることになる。幕末から明治にかけて茶会がいかに盛んであったかを、次の茶事録は見事に物語っている。

「茶事録」	嘉永6年1月2日より文久元年8月18日まで	28回
「茶事順會録・杖芸荘」	文久元年10月23日より文久2年10月13日まで	23回
「茶秘録」	明治7年1月3日より明治12年4月まで	41回
「中尾彦助茶事控」	明治17年2月22日より明治28年3月12日まで	16回
「茶秘録・友松茶寮」	明治27年5月13日より明治45年1月5日まで	34回

上に挙げた「茶事録」「茶事順會録・杖芸荘」「茶秘録」<sup>64)</sup>は天野嘉四郎の手控自他会記で

ある。今、文久元年（1861）の「茶事順會録・杖芸莊」を例にとると、文久元年には、飯後・月次順會・正午茶事等が8回も催されている。文久2年には、正午・飯午・稽古・夕等の茶事が24回も催され、当時の有力商人である橋本吉兵衛（藪内流）や亀山元助・児玉喜三・松井圭蔵・石井九右衛門（藪内流）、さらには浄土寺・雲晴寺が席主となって交友を暖め合っていることも偲ばれる。尾道の茶人たちは、速水流、藪内流の流派にこだわることなく茶席に互いに招きあった。また、飯後の茶事を好み、備前と比較して、これが圧倒的に多いことに特徴がある。商売の時間とも関係があったのであろうか、大いに興味をそそるものがある。「茶事録」によると、客人の顔は大阪、京都、与州松山にも及んでいる。この点を考えると、交易がいかに活発であったかをうかがうことができるだろう。

宗寛筆「兎道名水記」<sup>65)</sup>（元治元年）に明治8年6月23日蒸気船で京都より尾道へ24日夜着岸した。7月10日尾道銘水「柳ノ水」を目方により調べる。島居儀右衛門山莊の水も銘水ではないが質が良いと書留めている。宗寛は地方の銘水にも関心があったことがうかがうことができる。

尾道の資料の中に、安政5年戊午霜月朔日「養壽院宗達居士五十年忌追善茶湯飯後」<sup>66)</sup>を法華宗妙宣寺で催したという會譜がある。本堂仏壇に養壽院位牌を飾り、中央供香、左右立花の前で読経があげられた。次いで、客殿に茶席を移して飯後の茶事が催されている。この追善会は、児玉喜三らが催し、客に浄土寺・光明寺・雲晴寺・天野煤溜らが招かれたのである。尾道に伝わる伝授書の中に、宗寛筆「風炉灰仕法順序書」、宗寛加筆「台子・長板点法聞書集三」「茶道聞書」「炉風乱三段秘録」<sup>67)</sup>等があり、生玉茂七に宛てた宗汲の書簡に写本の件が語られているから、写本は当時、伝授の方法として一般的であったのだろう。宗汲は、明治38年（1905）4月19日から23日まで、尾道市中尾別邸において、門人の天野嘉四郎他22名を招いて還暦祝賀茶会を催している。明治10年の「茶事録」には、宗汲席主の稽古茶事が2月18日から20日まで催されたと記されている。西村順三の1月9日の年始茶事に宗汲が招かれていること等を考えると、尾道の門人たちとの強い師弟関係を裏付けることができる。備後における茶人としては、尾道を除いて三原の茶人も茶会記に登場している。宗寛は竹原市にも足を延ばし松阪義太郎を門人としている。けれども福山は、人見宗玄筆「福山日記」<sup>68)</sup>には登場するものの、戦災のおかげで現在調査する限り、速水流の関係史料を目にすることはできない。この点については今後の課題としたい。ともあれ備後は、宗寛によって開拓された基盤であることに間違いはないだろう。

## ま と め

以上、地方から速水流を眺めると、新史料の発掘を通しておよそ次の点が確認できた。

1. 宗達以降四代宗汲まで儒者伊藤東所以降の歴代と深いつながりをもっていた。
2. 近江八幡の有力商人が、速水流茶道を嗜なむと同時に、強い結び付きをもっていた。
3. 備前は宗達の時代から門人はいたが、三代宗寛に至って、備中・備後にまで門人が

拡張したこと。なお四代宗汲によって、その門人は三原・広島にまで広がりを見せている。

4. 三備を調査する限り、幕末には備前・備中・備後の町人である惣年寄・年寄を、明治には県令・町長等の行政面での実力者を、それぞれ門人に迎えていること。
5. 宗寛・宗汲は京都を出発すると、長期にわたって地方の門人宅に滞在し、伝授にあっていること。地方の者は幕末には、人見家のように家元に寄宿して伝授を受けるのは例外で、その多くは、家元の下向時に数少ない機会を捉えて指導を受ける外には、伝授書の写本や書簡による質問を用いるしかなかった。明治に入ると、宗汲は毎年のように三備を訪れるまでになった。ここに、速水流が流布した大きな理由があると思われる。

今回は、三備を中心に速水流を考察してみたが、その中で思われたことは、先駆者の研究論文を徹底して踏査するとともに、宗達・宗曄に関する新たな史料の発掘にも努めなければ、速水流を十分には語りえない点であった。これについては、今後の課題としなければならない。

最後に、資料を提供していただいた東北大学附属図書館・天理大学附属天理図書館・岡山県立博物館・金光図書館、速水宗楽氏と門人の諸氏、さらには文書の解説と小論発表に惜しまぬ指導と助言をいただいた倉敷市史編集委員片山新助氏に、深く感謝いたします。

## 註

- 1) 42) 高草藍山『緑塵』(昭和12年刊)による。
- 2) 天理図書館業書『古義堂文庫目録』(第21輯, 昭和31年刊)による。
- 3) 12) 難波勲示蔵, 速水宗達著・宗曄校を難波ユカが昭和3年に写本による。
- 4) 10) 20) 神原邦彦「速水宗達とその著書〈喫茶指掌編〉について」(『就実女子大学史学論集』平成元年)等に詳しい。
- 5) 8) 9) 18) 28) 29) 31) 64) 66) 金光図書館蔵「青木茂奇贈資料」に宗寛より天野半次郎宛の書簡の中に茶事録が13通ある。本稿では「宗寛茶事録」とした。
- 6) 67) 生玉満子所蔵, 宗寛加筆「茶道七事式」は天野半次郎が筆写し宗寛が加筆している。
- 7) 速水流源会編『茶道速水流』(昭和56年刊)による。
- 11) 16) 32) 41) 歴代の好物は「北野献茶祭目録」や「茶秘録」等の茶会記による。
- 13) 37) 43) 47) 48) 49) 50) 52) 54) 55) 岡山県立博物館蔵「人見家文書」
- 14) 17) 22) 23) 25) 26) 27) 33) 44) 45) 58) 63) 65) 東北大学附属図書館蔵「茶博士速水宗達稿本並速水家雑纂」
- 15) 19) 『滋賀県八幡町史』(昭和15年刊)による。
- 21) 24) 46) 53) 60) 高草藍山「池田茂政侯の茶趣」(『汎岡山』昭和16年刊)による。
- 30) 『茶湯』9号(昭和50年刊)による。
- 34) 36) 38) 福島太郎蔵
- 35) 『茶湯』13号(昭和52年刊)による。
- 39) 40) 生玉満子蔵
- 51) 片山新助『近世岡山町人の研究』(昭和59年刊)による。
- 56) 岡山県職員録刊本(明治14年刊)による。
- 57) 倉敷自然をまもる会『児島風土記』(昭和57年刊)による。

59)61)68) 桂又三郎『岡山茶道資料』(昭和55年刊)による。

62) 青木 茂『尾道市史』中巻(昭和15年刊)による。

## The Hayami Tea Ceremony School and its Followers in Bizen, Bichu and Bingo Areas

Hideji INOUE

*General Affairs office for Graduate School*

*Okayama University of Science,*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1994)

Hayami Sōtatsu was one of the greatest tea ceremony of the late Tokugawa era. In Kyoto, he took tea ceremony lessons from Sōshitsu, the great master of the Urasenke school, and learned Confucian ideas at the Itokogidō juku established by Jinsai Itō. Rediscovering the old styles which had been obsolete since Rikyū and Sōtan passed away, Sōtatsu created an original style, wrote many books on the tea ceremony, and established the Hayami school.

In general, still research has been done on early modern tea ceremony masters. Several schools that still exist, however, there have been few papers written on the Hayami School, that throw light on its historic masters and its influential followers.

In this paper, in order to present how the school style was handed down from generation to generation, reviewing the writings owned by Tohoku University Library, Okayama Prefectural Museum, Konkō Library and those remaining in Bizen, Bingo Bichu areas, I have tried to rediscover not only the four school heads, the creator Sotatsu Hayami, the second Sōyō, the third Sōken, and the fourth Sōkyū; but also several influential school followers who lived in such places as Kyoto, Ohmihachiman and Kawachiyao, and such areas as Bizen, Bichu and Bingo.

As a result, there are four main reasons that explain the present popularity of the Hyami school in these particular areas and places: (1) Starting from Sōtatsu, the first four heads showed respect to Confucian ideas of Jinsai Itō. (2) In Ohmihachiman, Kawachiyao and Bizen, Bichu and Bingo areas, the school could find its followers among affluent, influential local commoners in the late Tokugawa era, and among influential local government officials in the Meiji era. (3) From the late Tokugawa era, the heads visited Bizen, Bichu and Bingo areas every year to give lessons on the tea ceremony.